

# 陸前高田市文化遺産調査におけるESD教材開発（6）

－「自助」の力を育むESD防災教育－

栗谷正樹

（奈良教育大学大学院 教科教育専攻 社会科教育専修）

後藤田洋介・辰巳太基

（奈良教育大学大学院 教科教育専攻 理科教育専修）

赤津將之

（奈良教育大学大学院 教科教育専攻 造形表現（美術・書道）・伝統文化教育専修）

唐澤亜由美

（奈良教育大学 家庭科教育専修）

佐野宏一郎

（奈良教育大学 文化遺産教育専修）

中澤静男

（奈良教育大学 次世代教員養成センター（ESD・課題探究教育部門））

## The Sixth Teaching material creation for Education for Sustainable Development at researching cultural heritage in Rikuzentakata city

－ESD and Education for Disaster Prevention to Foster the Ability of “Self－Help”－

Masaki KURITANI, Yosuke GOTODA, Taiki TATSUMI, Masayuki AKATSU

（Graduate School of Education, Nara University of Education）

Ayumi KARASAWA, Koichiro SANO

（Undergraduate Student, Nara University of Education）

Shizuo NAKAZAWA

（Teacher Education Center for the Future Generation, Nara University of Education）

**要旨：**陸前高田市文化遺産調査を実施して5年目となる。岩手県陸前高田市は平成23年に起きた東日本大震災において多大なる被害を受けた。陸前高田市では、このような被害を二度と出さないように、行政やコミュニティのレベルでの防災の取り組みが行われていることを本調査によって再確認することができた。本稿では、「自助」をテーマとした学習を提案する。児童が自然災害を自らの問題と捉え、情報を批判的に思考し、自らの行動を変革させる、防災教育を通じたESDの学習を提案する。

**キーワード：**持続可能な開発のための教育 Education for Sustainable Development

東日本大震災 Great East Japan Earthquake

自助 Self-Help

### 1. はじめに

奈良教育大学では、地域と連携した「学ぶ喜びを知り、自ら学び続ける」教員の養成に向けた持続可能な開発のための教育活性化プロジェクトの一環として、陸前高田市を中心とした文化遺産調査に取り組んで5年目となる。今年度は、「ESDを核とした教員養成における高度化―教員養成・研修におけるESDモデルプログラムの開発と普及」の一環として、本学教員2名、大学院教育学研究科修士課程4名、学部生2名からなる調査チームで、2016年9月

7日から10日にかけて、文化財科学や美術史学の知識を活用した文化遺産調査、及びESD・防災教育の研究開発に取り組んだ。

今回の調査の主な日程は、以下の通りである。

1日目

- ・奥州市真城寺阿弥陀如来像立像の調査
- ・同市黒石寺薬師如来坐像と十二神将立像の見学

2日目

- ・陸前高田市教育委員会への表敬訪問
- ・陸前高田市消防防災センターでの聞き取り調査
- ・コミュニティカフェでの聞き取り調査

- ・宮城県気仙沼市地福寺地藏菩薩立像の調査  
3日目
- ・陸前高田市向堂観音堂十一面観音坐像の調査
- ・避難所生活の聞き取り調査
- ・常膳寺十一面観音菩薩立像、千手観音菩薩立像の調査

4日目

- ・大崎市薬師神社の十二神将立像の調査
- ・宮城県七ヶ浜町湊浜薬師堂の磨崖仏の調査

本稿では、消防防災センターでの聞き取り調査、避難所生活の体験や、津波体験の聞き取りなどで学んだことを中心に、災害時の「自助」の力の育成を目的として作成した教材について報告する。

昨年度の研究報告では、陸前高田市での聞き取り調査を踏まえ、復興中のまちづくりの精神が、日本ユネスコ国内委員会が提唱している、ESD で育てたい価値観と共通していることを見だし、「まちづくりを題材に教育活動を行うことによって、持続可能な発展に関する価値観を養うことができ、持続可能な社会に参画していく意思を養っていけると考えられる」<sup>(1)</sup>とし、自分たちのまちに興味を持つような教材を作成した（後藤田・中澤 2016）。今回の調査では、陸前高田市消防防災センターでの聞き取り調査において、「東日本大震災前では、指定された場所に集合することが重要視されていたが、現在では、ハザードマップを見て、考え、どこに逃げるのかを自分で決めておく必要がある」という話を聞くことができた。また、「(海岸線に近い) 駅前通りの店舗では、地震の片づけをしていた。「片づけよりも避難しないと」と声を掛けたが、半数以上の命が失われた」と、昨年度も訪れたコミュニティカフェの方から話をうかがうことができた。これらのことから、災害時に自ら避難経路を考え、避難を実行に移していくことを主題とした ESD 教材の開発を着想した。

## 2. 防災とESDについて

片田 (2012) は、防災では主体的な行動が重要であると、自然災害から身を守るためには、「人為的に与えられた想定にとらわれることなく、また自らの命を行政に委ねることなく、主体的にその時の状況下で最善を尽くすこと以外にありません。」<sup>(2)</sup>と述べている。換言すると、自然災害から身を守るためには、与えられた情報を批判的に思考し、主体的に行動することが必要であるといえるだろう。ESD では育みたい力の一つとして批判的思考が挙げられており、行動の変革が求められていることから、防災教育が ESD で取り扱う一つの内容としてふさわしいものであるといえる。

東日本大震災前から防災教育に積極的に取り組んでいた気仙沼市教育委員会では、東日本大震災の教訓として、「自助」が必要不可欠であると結論づけている。「自分の置かれている状況をもとに、より良い行動について考え、積極的に行動しようとする態度」が必要であると、「自

ら考え行動しようとする態度」を気仙沼市教育委員会独自の ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度として設定している。<sup>(3)</sup>

## 3. 陸前高田市の東日本大震災検証について

陸前高田市では、平成 23 年に発生した東日本大震災で 1757 名が犠牲となった。また、市役所や避難所も被災した。この被害に対して、「なぜこれほどの被害がおき、人命が失われたか」の要因を検証するとともに、災害対応の教訓を整理し、今後発生が予想されている南海トラフ巨大地震、首都直下地震などに対する全国自治体の防災計画の参考となる」<sup>(4)</sup>ことを目的とし、『陸前高田市東日本大震災検証報告書』（以下検証報告書）が作成されている。この検証報告書では、大きく 5 つのことが教訓として述べられている。一つ目に避難が何よりも重要であること、二つ目に避難所に逃げたら終わりではないということ、三つ目に公的な役割を持つ人の安全の確保が必要であること、四つ目に災害に強い安全なまちづくりが必要であること、五つ目に社会的弱者も安全に生活できる社会の実現が必要であることである<sup>(5)</sup>。本稿では、自助についての教材を提案するために、一つ目の避難が何よりも重要であること、および二つ目の避難所に逃げたら終わりではないということについて着目し考察する。

まず、一つ目の避難が何よりも重要ということに関して、避難のタイミングと被害状況に関する調査では、津波死亡・不明の人の 5 割が津波の到達後に避難していたのに対して、被害なしの人では 8 割の人が地震の発生直後や津波の到達前に避難を開始している。このことから、「主に地震発生時に津波浸水域にいて、想定されていた状況よりさらに積極的な避難行動を取らなかった、あるいは避難が困難だった人が死亡・行方不明となった可能性がある。」<sup>(6)</sup>と述べられている。災害発生の直後の積極的な避難が必要であり、それらを決意するための防災への意識づけが必要であるといえる。

二つ目に避難所に逃げたら終わりではないということについては、同書に「東日本大震災当時、津波避難所として指定していた一時避難所 67 か所のうち 38 か所が被災するとともに、9 か所で推計 303 人から 411 人の尊い命が失われました」<sup>(7)</sup>と述べられている。一方、学校管理下において被害が少なかった要因として、教職員の的確な判断があったことや、地域の住民が、さらに安全な場所に導いたことで被災を免れたケースなどがあった。以上のことから、避難所に避難するだけでなく、場面に応じた判断が必要であり、今いる場所よりも安全な場所を探していくことが必要であるということが分かる。

以上の 2 点から、災害時の積極的な避難や、臨機応変な避難を行えるような防災教育が必要であることが明らかである。

#### 4. 聞き取り調査について

今回の調査では、陸前高田市民を中心に、様々な人々に聞き取り調査をすることができた。これらの調査結果を以下に示す。

- ・東日本大震災の前では、指定された場所に集合することが重要視されていたが、現在では、ハザードマップを見て、考え、どこに逃げるのかを自分で決めておく必要がある。(陸前高田市消防防災センター職員)
- ・行政の職員のための初動マニュアルを作成した。そのマニュアルでは、業務よりも命が優先であること、津波の到着 10 分前には避難が完了しているようにすることを規定した。(同上)
- ・(海岸線に近い) 駅前通りの店舗では、地震の片づけをしていた。「片づけよりも避難しないと」との声掛けもあったが、半数以上の命が失われた。(コミュニティカフェ店員)
- ・避難所指定されていないオートキャンプ場にたくさんの方が避難してきた。スタッフとして活動できる人の取りまとめや、避難所の運営を行っていた。(災害対策特別委員会関係者)
- ・老人ホームの職員が、通院状況や薬の服用状況などの調査を自主的に行っていた。この活動は医療スタッフへの引継ぎをスムーズにした。(同上)
- ・便利な駅前ではなく、高台に住んでいた。「なぜ、あんなに不便な所に住んでいるのか」と言われたこともあったが、今ではその判断が間違っていなかったと思っている。その経験から、周りの意見に流されずに、自分の信念を突き通すことも重要であると考えている。(高田松原を守る会会員)

これらのインタビューを通じて、以下の知見を得ることができた。

- ・何よりも避難を優先すること
- ・避難後もより安全な場所に移動したり、避難所の運営に携わったりするなどの行動が必要であること
- ・行政や周囲の意見を鵜呑みにせず、自ら批判的に考え、行動していくこと

これらの知見を活かし、次章では災害発生時の「自助」の力を養うための学習指導(表1参照)を提案したいと思う。

#### 5. 学習活動の概要

これまでで、防災では、主体的な行動と、最善を尽くすことが重要であり、それらを身に付けることこそが ESD であるということ述べ、さらに、陸前高田市東日本大震災検証報告書から、「避難することがまず重要であること」「避難に際しても、臨機応変に行動すること」が必要であると述べた。陸前高田市文化遺産調査における聞き取り調査では、陸前高田市消防防災センター職員の「ハザードマップを見て、考え、どこに逃げるのかを自分で決めておく必要がある。」という意見や、「便利な駅前ではなく、高

台に住んでいた。「なぜ、あんなに不便な所に住んでいるのか」と非難されたこともあったが、今ではその判断が間違っていなかったと思っている。」という聞き取り調査に表れているように、周囲に流されることなく、自ら判断をし、行動するしていくことが必要であると考えられる。以上より、学習活動として、災害時にどのように避難するかを題材とし、情報を批判的に捉え、自らの行動を決定していくような活動を取り入れた学習を提案したいと思う。

#### 6. まとめ

平成 28 年度陸前高田市文化遺産調査の一環として、災害時の避難方法を考え、「自助」の意識を育む教材を提案した。防災では、自らの身を守る「自助」、周囲と助け合う「共助」、そして行政からの支援である「公助」が「3助」として有名であるが、その中でも自らの身を守る「自助」を行う力は、重要な位置づけを占める。東日本大震災以前の陸前高田市民への意識調査で「チリ地震津波は、高田小学校まで来なかった。そのため、津波は学校まで到達するとは考えていなかった。」<sup>(8)</sup> という証言や、東日本大震災が顕在化させた防災の問題点として「防災が進むことによって、社会と人間の脆弱性が増し、住民を「災害過保護」というべき状態にしてしまう」<sup>(9)</sup> と片田 (2012) が指摘しているように、過去の災害で被害が小さかったために、自分が直面している災害でも大丈夫であるというような意識が生まれたり、想定にとらわれることで、被害が増してしまったりすることもあり得るだろう。現在、陸前高田市では、住民が身を守るために、自ら避難する場所や経路を考え、避難情報が出されるとともに、実践されている。災害から月日が経過した際でも、私たちも自らの身を守ることでできる防災教育を目指していきたい。

#### 引用参考文献

- (1) 後藤田洋介・中澤静男 (2016)、「陸前高田市文化遺産調査における ESD 教材開発 (5) —まちづくりを題材にした ESD」、奈良教育大学次世代教員養成センター研究紀要、第 2 号、pp. 205-209.
- (2) 片田敏孝 (2012)、人が死なない防災、集英社、pp. 51-52.
- (3) 気仙沼市教育委員会 (2014)、「平成 25 年度気仙沼市教育研究員研究紀要」、p. 49.
- (4) 陸前高田市 (2014)、「陸前高田市東日本大震災検証報告書」、p.8.
- (5) 同上、p. 2-3.
- (6) 同上、p. 62.
- (7) 陸前高田市 (2014)、「陸前高田市東日本大震災検証報告書 概要版」、p.6
- (8) 前述、陸前高田市、「陸前高田市東日本大震災検証報告書」、p.81
- (9) 前述、片田 (2012)、pp.46-47

表1. 単元名、対象学年、単元の目標、評価規準

単元名 (対象学年・教科)	災害時に自分の身を守る方法を考えよう (小学校6年生 総合的な学習の時間)		
単元の目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・震災やハザードマップ、避難経路に関心を持ち、自分たちで考えた避難方法を行動に移そうとする。(関心・意欲・態度)</li> <li>・状況に応じて、より安全な避難方法を判断し行動に移している(思考・判断・表現)</li> <li>・ハザードマップの検討など、必要な情報を集めたり読み取ったりしている。(資料活用)の技能)</li> <li>・想定以上の災害が発生することがあることを知り、避難の重要性を理解している。(知識・理解)</li> </ul>		
関心・意欲・態度	思考・判断・表現	資料活用)の技能	知識・理解
①震災やハザードマップに関心を持ち、学習に積極的に参加することができる。 ②自分たちで考えた避難方法を行動に移すことができる。	①状況に応じて、より安全な避難方法を判断することができる。 ②グループで作成した避難方法をわかりやすく表現することができる。	①ハザードマップの検討など、必要な情報を集めたり読み取ったりすることができる。	①避難の重要性を理解することができる。 ②ハザードマップの想定を超える被害が発生する恐れがあることを理解することができる。

表2. 学習活動の概要 (全12時間)

学習活動・学習内容 (時間)	指導上の留意点	◇評価・備考
1. 東日本大震災の概要について学ぶ。(1)	・視覚的な資料を用い、震災の概要を学ばせる。	◇避難の重要性を理解することができる。(知・理①)
2. 自治体が配布しているハザードマップをもとに、グループごとに避難経路・方法を考える。(2)	・自治会単位、もしくは自宅の近い児童でグループを組ませる。	◇震災やハザードマップに関心を持ち、学習に積極的に参加しようとしている。(関・意・態①) ◇状況に応じて、好ましい避難経路・方法を判断することができる。(思・判・表①)
3. 考えた避難経路・方法を発表し、地域の方からアドバイスをもらう。(1)	・自治会長、防災担当の地域の方に協力を依頼する。	◇必要な情報を集めたり読み取ったりすることができる。(技①)
4. 陸前高田市の事例をから、ハザードマップの想定を超える被害が発生する恐れがあること、震災を教訓に現在取り組んでいることを学ぶ。(1)	・陸前高田市のハザードマップ(震災前)や津波浸水域のマップ等を用いながら、当事者の思いや体験談を活用する。	◇ハザードマップの想定を超える被害が発生する恐れがあることを理解することができる。(知・理②)
5. これまでの学習を踏まえた上で、避難経路・方法の修正を行う。(3)	・学校にいるとき、自宅、海の近くなど、複数の場所や、地震、津波、大雨など、様々な災害を設定する。	◇状況に応じて、より安全な避難経路・方法を判断することが出来る。(思・判・表①)
6. 各グループで作成した避難方法を発表し合い、全体で共有する。(2)	・共有した方法を元に、自分達の避難方法を見直しさせる。	◇グループで作成した避難方法をわかりやすく表現することができる。(思考・判断・表現②)
7. 実際に考えた避難方法を用いて避難訓練を行う。(2)	・保護者の方、地域の方と協働して避難訓練を行う。	◇自分たちで考えた避難方法を行動に移すことが出来る。(関・意・態②)